

THE MUSEUM OF ART, KOCHI

no. 113

KENBI LETTER

ケンビレター

2022. spring

没後70年 山脇信徳展

2022(令和4)年3月30日[水]—5月15日[日]

山脇信徳 《小雨の高知》1929年以降

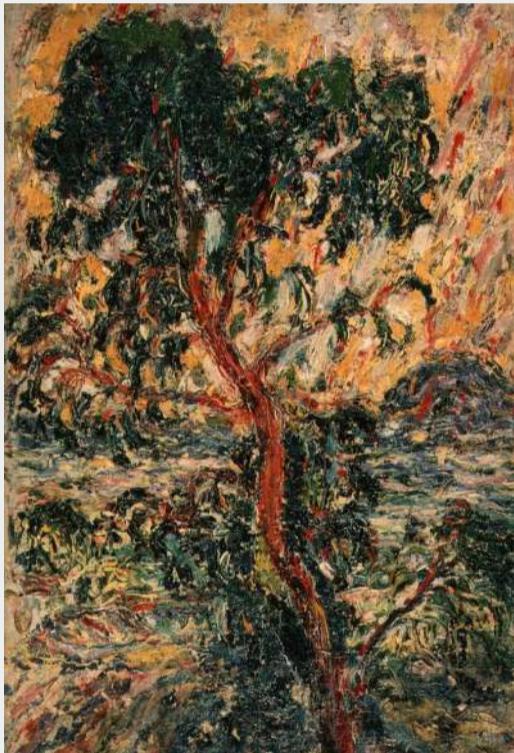
高知県立美術館
THE MUSEUM OF ART, KOCHI

Exhibition Information - 01

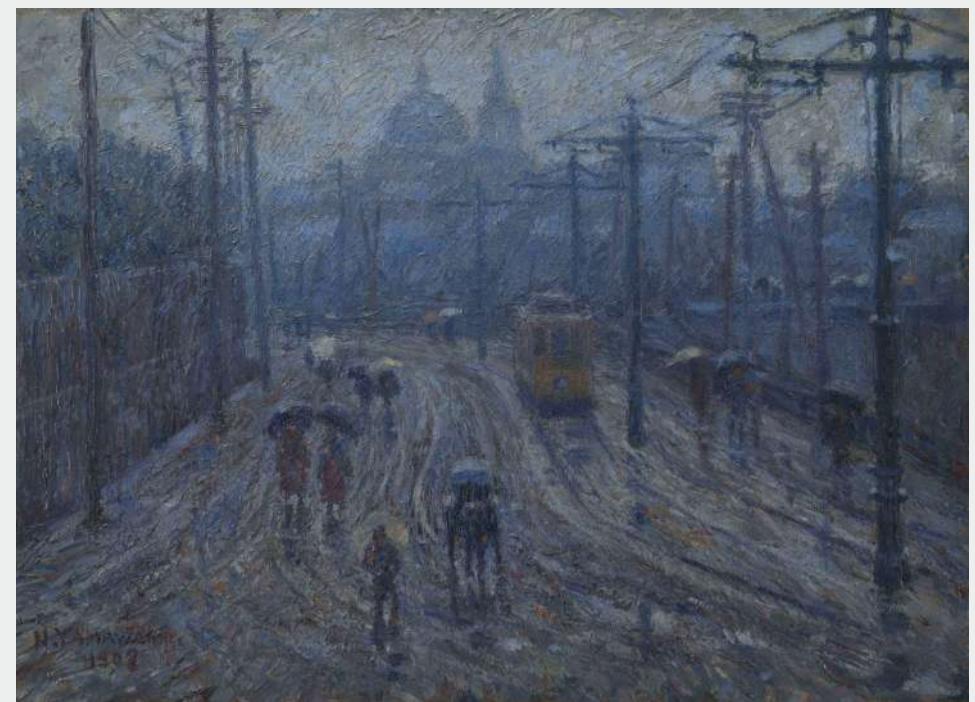
没後70年
極端から極端へ—印象派を越えて郷土へ

山脇信徳展

高知市出身の洋画家・山脇信徳は、東京美術学校在学中の1909年、23歳の時に第3回文展に出品した『停車場の朝』で大きな注目を集めます。日本における印象派の作例として必ず言及されるこの作品は、残念ながら戦火で焼失てしまい、画像でしか知ることができません。その前の年に描かれた『雨の夕』は『停車場の朝』と同様の作風であると考えられています。近代美術史上でも重要なこの作品は、ここ数年で最も県外に貸し出す機会の多かった作品です。描かれているのは東京・お茶の水の風景。雨のなか傘をさす人とその横を通る路面電車、そして遠景にニコライ堂のドームのある特徴的な建物が薄暗い天気のもと描かれています。電柱の縦の線と蛇行する線路がリズミカルな印象を与え、厚く塗った絵具と微妙な色彩の変化によって雨の情景をとらえています。駅や列車といった近代都市の風景はフランスの印象派もよく描いた画題であり、初期の山脇の傑作です。同じ時期に山脇は志賀直哉やバーナード・リーチといった雑誌『白樺』の人々と親しくなります。『白樺』は、17世紀の美術からロダンやゴッホ、セザンヌといったポスト印象派などの同時代の西洋美術まで紹介し、美術雑誌としての性格も強いものでした。残された山脇のノートや資料からは古典古代から最新までの美術の歴史や情報を貪欲にキャッチし、自分の作品へ取り込もうとしていたことがわかります。山脇はその後1912年に東京を離れ、滋賀県で教師をしたあと、中国・奉天、そして念願の欧洲へ行き、1929年に高知へ戻ってきます。その間、より強烈なタッチと色を使った作品、微妙な色の諧調が美しいパステル画など、さまざまな作風で作品を制作。帰郷後は高知の風景・風俗を題材に輪郭線の強い作品を描きました。約20年ぶりにまとめて展示する展覧会を通じて、多くの人に山脇信徳の存在を知っていただければと思います。文・柳澤宏美(当館学芸員)



上《満州風景》1922-25年
左《樹と外光》1918年
作者はすべて山脇信徳。
所蔵先の記載のないものは高知県立美術館蔵。



《雨の夕》1908年 高知市蔵

作品の再撮影・掃除中



当館で山脇作品をまとめて展示するのは2000年の「山脇信徳展」以来約20年ぶり。久しぶりに展示する前に《雨の夕》を含むいくつかの作品の撮影・掃除を行いました。額から作品をはずし、ガラスをきれいにします。作品の裏書なども確認しつつ、カメラマンが写真撮影。印刷物できれいな図版を掲載するために最新カメラで撮影するのも重要な仕事です。

2022年3月30日[水]—5月15日[日] 9:00-17:00(入場は16:30まで) 会期中無休

会場=高知県立美術館 第2・3展示室

観覧料=一般当日600円(480円)、大学生当日400円(320円)、高校生以下無料 ※()内は20名以上の団体割引料金。
※前売券販売なし ※年間観覧券所持者は無料。※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳 及び被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)、高知県及び高知市の長寿手帳所持者は無料。

主催=高知県立美術館(公益財団法人高知県文化財団)

後援=高知県教育委員会、高知市教育委員会、高知新聞社、RKC高知放送、KUTVテレビ高知、KSSさんさんテレビ、NHK 高知放送局、KCB 高知ケーブルテレビ、エフエム高知、高知シティFM放送

Exhibition Information - 02

現代版画の愉しみ

●前期=3月26日[土]-5月18日[水] ●後期=5月20日[金]-7月18日[月・祝]

版画は印刷することにより複数の作品を制作することができる美術の技法です。単純に平面上に絵を描くだけではなく、製版や印刷という過程を経るために独特の表現が加わり、版画ならではの妙味が生成されます。当館のコレクションから、近代から現代に至る、約100年の間に産み出されたさまざまな名品を展示し、版画の可能性と射程を紹介します。前期の中心になるのは、1986年に出版された版画集『ヨーゼフ・ボイスのために』です。戦後の美術を牽引したヨーゼフ・ボイス(1921-86)の死を悼み、同時代の作家50名が作品を出し合って編まれたアンソロジーです。また後期には、医療ボランティアを世界各国に派遣して人道支援に取り組むNGOの活動に賛同した23人の作家による版画集『世界の医療団』(1994年)を展示します。これら大規模な版画シリーズ以外にも、ムンクやマティス、ペークンといった巨匠の作品から、「高知国際版画トリエンナーレ」で「県立美術館賞」を受賞した若手の作家まで、バラエティに富んだ作品が並びます。軽やかで、奥深く、力強いグラフィック作品の魅力を存分にご堪能ください。

文・奥野克仁(当館学芸課長)



エドヴァルト・ムンク 《二人・孤独な人たち》 1895年

アンリ・マティス 《ジャズ》から《サーカス》 1947年

展覧会報告

ARTIST FOCUS 平川恒太展関連イベント #02 「鑑賞と対話のための茶会」報告

●2022年1月8日(土) すさきまちかどギャラリー／旧三浦邸

ARTIST FOCUSシリーズの第2回「平川恒太 - Cemetery 祈りのケイショウ」展。その関連企画として、すさきまちかどギャラリーではサテライト展示「LIFE・FORM」を開催しました。この展示で出品した「森の茶会」シリーズにちなみ、1月8日には日本茶インストラクターの柿谷奈穂子さんを招き、会場の旧三浦邸でイベント「鑑賞と対話のための茶会」を行いました。イベントでは、参加者は平川さん本人による解説付きで会場の旧三浦邸主屋に配された作品を見て回り、最後に柿谷さんが用意したお茶を飲みながら作品について語り合います。柿谷さんがお出してくれたのは、「碁石茶」という大豊町に受け継がれる伝統的な製法で作られたお茶。茶葉を発酵させて作る碁石茶には独自の酸味がありますが、今回は柿谷さんが梅干しと塩昆布を入れ、スープのようにして飲むことを提案してくれました。参加者の皆さん、道具を入れることで風味が変わる碁石茶の味わいを楽しみながら、平川さんとの会話を通して思い思いに意見を言い、作品への理解を深めています。お茶を飲むと緊張気味だった参加者の表情がほぐれていくのが印象的で、お正月の時期にぴったりの和やかなイベントとなりました。文・塚本麻莉(当館主任学芸員)



コレクター福富太郎の眼関連イベント 記念講演会報告 「戦後最高のコレクター・福富太郎さんと私」

●2022年1月29日(土)

展覧会初日、本展監修の山下裕二先生をお招きし、記念講演会を開催しました。山下先生は生前の福富太郎さんと親しい交流があった美術史家で、福富さんがマリリン・モンローをお好きだったなどの裏話も交えながら、福富さんのお人柄やコレクションの魅力をご紹介いただきました。山下先生はご自身も日本美術応援団などの活動でさまざまな画家に新たなスポットライトを当てて来られ、2009年には高知にお越しになって絵金めぐりもされています。近年、渡辺省亭や小村雪岱など、福富さんが先駆けて集めていた画家たちを顕彰する展覧会を監修した話などを交えながら山下先生の視点から語られる福富コレクションの先見性に担当学芸員も改めて感服しました。コロナ禍での開催ではありましたが、90人近くの方に講演会をお楽しみいただけました。文・中谷有里(当館主任学芸員)



MUSEUM HALL INFO

美術館ホール 報告

冬の定期上映会 ●2022年1月19日(水)～23日(日) 美術館ホール

「撮影監督 近森眞史 特集」近森氏トーク／1月23日(日)

近森さんは、日本アカデミー賞優秀撮影賞を7回受賞した日本映画を代表する撮影監督。今回は自分の作品をじっくりと見直す良い機会になると、早めに帰高し、連日上映会に足を運んでくださいました。トークでお話いただいた内容を一部紹介します！

聞き手・浜口眞吾(当館企画事業課長補佐)

Q. なぜ日本大学芸術学部の映画学科に進学されたのですか？

A. 高校の時、人付き合いが苦手でしゃべるのが好きではなかったんですね。図書館で勉強していた時に、人に接しないで済む仕事はないのかとずっと思っていて、学芸員になりたいなと思ってたんです。東京に出てデッサンの勉強もしたんですけど、デッサンが必要な大学は落ちました。浪人していた時に映画が好きだったなと思って、あの当時テレビでは世界の国々や民族、文化を紹介する「すばらしい世界旅行」をやっていました。そういうところから映像民俗学というのには興味があったんです。日大の映画学科に入って映像民俗学をやるならいいかなと思ったんです。

Q. 卒業後フリーのカメラマンとなり、川又昂さんや高羽哲夫さんという松竹を代表するカメラマンの助手に付いた経緯は？

A. 日大の映画学科は松竹大船撮影所と繋がりがあったんです。映画学科は僕に合っていて、いろんな事をやって楽しく過ごしました。卒業制作として作った3本の作品の審査の講評もよかったです。そこで大船出身で川又、高羽両氏と仲の良かった宮崎晃監督が5月ごろになって、「近森は今何やってんだ」と気にしてくれて、突然「大船に行け、話はつけといだ」と言われて巨匠2人に弟子入りしたんです。

Q. 普通カメラマンの助手というとすごく長く勤められる方が多いですが、見習いからあっという間に助手になり、82年の野村芳太郎監督の「疑惑」でサード(フォーカス)^①に抜擢されていますね。

A. 当時の日本映画界は凋落の道をたどっていて、撮影部が正規の社員を採ったのが10年前だったんです。ですから僕が大船に入りしていた頃は、若くて体の動く奴がいなかったというのが抜擢の一一番大きな理由です。川又さんが助手に入ったのは戦争末期で、人が戦地に行って助手さんが少ない時代でした。川又さん自身も厚田さん^②という小津組^③のカメラマンに早くに助手にしてもらったという事が頭の中にあったんだと思います。きちんとキャリアを積んでいく必要もあるんだけども、人手不足という状況と近森なら色々言わなくても仕事は出来るだろうという考えがあったんではないかと思います。



トーク中の近森氏

当館の星加コレクションにあるパンフレット等を見る近森氏

Q. 92年以降はBキャメ^④になりますが、これはどういう仕事をされるのでしょうか？

A. この当時のBキャメは芝居と一緒に撮るのではなくて、主に景色を撮る役割です。地方ロケに行って芝居を撮る本隊が終わっても、残って風景を撮影するんです。

Q. 高羽さんからは「このシーンの風景はこういう風に撮って」という指示があるのですか？

A. 指示はないんですよ。頑張ってね、と手を振って別れちゃう。自分で考えて画を撮れ、というのが大切な教育なんですね。大船というところは普段はカット割とかいろんな所がカメラマン主導で、監督は何も言わない、ということが多いんです。フィルムを時々撮影所に送り、そのフィルムを山田洋次さんと高羽さんが観て、帰って来いと言うまで帰れない。だからいつまでも帰れないんです。「息子」(山田洋次監督、1991年)の時は約1か月掛かりました。

Q. 近森さんが撮影監督として大切にしている事は？

A. お客様が見やすい画を作るという事だけですね。あまり奇をてらった構図というか、かっこいいというのは求めない。なるべく見やすい画を作るという事だけですね。「釣りバカ」も山田さんの作品もそうだけど、年配の方がご覧になる作品が多いので、大きいスクリーンで見やすいようにしたいなと思っています。

① サード(フォーカス) 撮影監督にはチーフ、セカンド、サード、フォースと通常4人の助手が付いた。サードは動く俳優にピントを自測で合わせていくピントマンの仕事。

② 厚田さん 厚田雄泰(1905～92年)は日本を代表する名カメラマン。37年の「淑女は何を忘れたか」の撮影途中から撮影監督となり、以後62年の「秋刀魚の味」まで松竹配給の小津監督の撮影監督を担当した。

③ 小津組 小津安二郎(1903～63年)は日本を代表する映画監督。ローポジションによる撮影や厳密な画面構成などが特徴で世界の映画人に大きな影響を与えた。映画の撮影クルーを日本では監督の名字を探って何々組と呼んだ。

④ Bキャメ チーフが担当する2台目のカメラの事。

「高知県立美術館能楽堂にて 本川神楽を舞う」

●2022年1月3日(月) 能楽堂 ●出演=本川神楽保存会

今年で5回目を迎えた、県内に伝わる神楽を紹介するお正月恒例企画。今回は、いの町本川地区の「本川神楽」を上演しました。地元では神社の秋祭で「夜神樂」として行われており、当公演でもその雰囲気を出すため、本川の神社で使われている暁と提灯をお借りし、松明に見立てた灯りを設置しました。神楽には小中高生が多く出演しており、その堂々とした姿に、しっかりと後継者が育っていることへの喜びの声が寄せられました。文・秦泉寺なほ(当館企画事業課)



これまでのお正月神楽



「名野川磐門神楽」(仁淀川町名野川地区) 2018年1月3日(水)上演

演目数16。手に鈴・扇子・幣などを持ち舞う出雲流探物神楽。「豊熟之舞」は豊穣感謝の演目で、春はなく秋のみ舞われる。

「池川神楽」(仁淀川町池川地区) 2019年1月3日(木)上演

演目数14。「児勤の舞」が有名な出雲流神楽。雅楽の冠り物である黒兜を着用するなど、衣装は華麗で優雅な趣がある。

「津野山古式神楽」(津野町) 2020年1月3日(金)上演

演目数17。六調子という足の運びや膝折り、鳥飛びなどの所作がある。アップテンポな太鼓とお囃子、激しい舞が特徴。

「津野山神楽」(椿原町) 2021年1月3日(日)上演 ※ライブ配信も実施

演目数18。言代主神が観覧席から飼や供物を釣り上げるユーモラスな演目「飼つり」が有名。早い拍子とダイナミックな動きが特徴。



これまで上演した神楽は、いずれも地域で守り継がれてきた個性的で貴重な高知の誇るべき郷土芸能です。国の重要無形民俗文化財にも指定されていますが、過疎化による後継者難などで存続が難しくなっており、関係者の必死の努力で維持されているのが実状です。この素晴らしい郷土文化がいつまでも続くよう、当館ではこれからも紹介を続け、応援していきたいと思います。